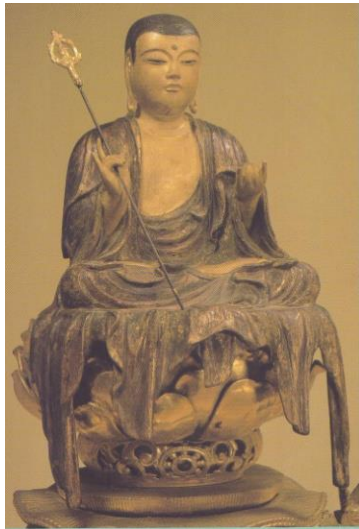


# 了義寺と杉の板戸絵



下山田の飛瀧山了義寺は、臨済宗建長寺派の寺院です。当寺は寺に残る古文書の写本や、『新編相模国風土記稿』を総合すると貞治6（1367）年8月足柄地頭和田宗時が足柄の山端荘（今の太井町山田字芭蕉）にあった真言宗無量義院を禅寺に改め、古先印元禅師（建長寺38世住職）を鎌倉長寿寺から招いて開山とした寺です。



地藏菩薩

現在の本堂は、天明6（1786）年、19世芝山禅師の時、下山田の富豪で、小田原藩の御用商人であった曾根惣右衛門の寄進により、再建し、このとき建てた本堂は総檜づくりで、現在もなおその威容を示しています。また、本尊の地藏菩薩は、専門的な調査によると室町時代初期の優れた作品で、もともと建長寺に伝来したという伝えに見合った像であるとの報告がなされています。



## 杉の板戸絵

本堂にある杉の板戸の水墨画は、江戸後期の桜井雪保<sup>つば</sup>の作です。父の雪館<sup>せつかん</sup>は水戸藩出身、江戸に出て室町期の雪舟<sup>せつしゅう</sup>の画法を研究し、画塾を開き門人を多く集めた画家で、その跡継ぎが娘の雪保です。近年、水戸市立博物館で特別展が開催されるなど女流画家として注目されています。

儒学<sup>じゆがく</sup>も修めた、芝山和尚の時代、江戸の儒学者の仲介で雪保を寺に招き、本堂板戸の作画を依頼したとされています。豪快さと繊細さを兼ね備えた板戸24面の絵は、寛政6（1794）年、雪保41歳の代表作で、その中でも仏間の前の「竜」「虎竹」図は、大胆な構図と伸びやかな線で描かれた傑作です。また、小板戸にある「梅」図の枝振りなどは、禅寺の中興<sup>ちゅうきやう</sup>を祝う構図ともいわれています。



町指定重要文化財 杉の板戸絵  
昭和46年6月8日指定



## 弁天社

了義寺境内の東には、弁天社<sup>べんてんしゃ</sup>があります。『新編相模のくにふどきことう国風土記稿』には、「了義寺弁天社の御神体は弘法大師が護摩の灰をもって造りしものという。背<sup>せ</sup>に手形あり、五本の指には天長7年（830年）7月7日江の島弁財天<sup>えしまべんさいてん</sup>において秘密の護摩一萬座<sup>ひみつ まんざ</sup>修行奉り、其の灰をもって此の像<sup>このざう</sup>を形作るものである。空海<sup>くわかい</sup>と記してある」とあります。江の島弁財天<sup>えのしまべんさいてん</sup>と関係が深く、願いが叶うとして昔から信仰されてきました。



弁天社